

【一宮基督教研究所サマー・スペシャルに向けて】G.E.ラッド著『終末論』から読み取る九つの遺言③

— One Chapter, One Message, from Ch.7 to Ch.9 —

<https://youtu.be/YNThTUMtyY0>

*

【導入】

先々週より、三回シリーズで、一宮基督教研究所の今年度の取り組みとしての「サマー・スペシャル」について紹介・案内させていただいています。今日はその最後、三回目です。

先週の注目すべき情報として、東京の御茶ノ水クリスチャンセンターで開催されました「島藺進氏の講演—緊急連続セミナー『この国はどこへ行くのか：世の秩序を超える選択肢を示せ』」があり、クリスチャン新聞にその要旨が掲載され教えられました。その明治維新から昭和そして今日に至る歴史認識、その状況分析において、わたしが神学校で「比較宗教学(宗教の神学)」で教えてきたことと同じ内容でありました。それで、自分の取り組んでいることに強い確信を与えられ、大変心強く思いました。

『この国はどこへ行くのか：世の秩序を超える選択肢を示せ』ということですが、現在、紹介しています「黙示録講解説教シリーズ」とラッド著『終末論』シリーズは、そのようなチャレンジに対するひとつの応答でもあります。ヨハネの黙示録やキリスト教の終末論から流れ出るメッセージは、この国のあり方に警鐘を鳴らしており、この国のあり方についてのひとつの選択肢を提示していると思います。

今朝は、ラッド著『終末論』の 7 章、8 章、9 章から、最も本質的なメッセージをひとつずつ聴き取り、それを「今日のさまざまな状況」に適用することで、参加申込された方には「学びのための心備え」、参加を迷っておられ方には「誘い水」、参加できない方には「のぞき窓」を提供させていただきたいと思えます。

*

最初に聖書を開きましょう。聖書箇所は、第一コリント 15 章です。この章で教えられることを三つあげますと、第一に、15:3-4、「最も大切なこととして、キリストは、聖書の示すとおりに私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと」があげられています。特に、この章は、「復活についての章」として、キリストの「復活」の事実性とその意味の私たちへの関係についての解き明かしに全力が注がれています。第二に、15:26、復活の後に終わりが来て、「最後の敵である死も滅ぼされます」と「審判」への言及があります。第三に、15:24-25、「キリストの支配」が確立、完成する「神の国」について語られています。

キリストの十字架のみわざと復活の中心性、そしてそのみわざが、わたしたちの復活、世界の審判、神の国の完成へと展開していくという「聖書に示されている”福音理解”の骨格」に焦点があわされ、明らかにされています。このような視点を念頭に抱きつつ、ラッド著『終末論』の 7 章、8 章、9 章から、ラッドが最も語りたかった「遺言」としてのメッセージのエッセンスに耳を傾けましょう。

*

【遺言としてのメッセージ⑦】

ラッド著『終末論』第七章「復活と携挙」から聴き取る、ラッドの第七の遺言メッセージとは何でしょうか。第七章は、「旧約聖書には、…肉体を伴った復活への望みについて幾つかの言及が見いだされる」

という言葉で始められ、新約聖書におけるイエスの復活の中心性が語られ、「復活において、キリストが「いのちの御霊」になったのであるなら、復活のときにイエスは目に見えない霊的な世界に入っていたと理解できる」、「そこからイエスは栄光に満ちた神的顕現…をもって人々のもとに現れる」、「この同じイエスが、今日御霊において、イエスのすべての民とともにあり、欲するかたちで、欲する場所で、欲するときにご自身を見えるようにすることができる」、「イエスは肉体をもってよみがえられた、そしてそのよみがえりは通常の時間と空間を超越する力をイエスにもたらした」と説明されています。わたしたちは、このような主の主、王の王を信じ、受け入れ、主のみを礼拝している神の民ですので、それを危うくするような性質、傾向を示す「現在の改憲の動き」に対しては大きな危機感をもっているところです。

*

【遺言としてのメッセージ⑧】

ラッド著『終末論』第八章「審判」から聴き取る、ラッドの第八の遺言メッセージとは何でしょうか。第八章は、「聖書は、人間ひとりひとり自らの行いに責任があること、そして聖く正しい神の前に立つ審判の日に直面しなければならないことを明確に教えています。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル9:27)という言葉で始められ、十字架の贖罪の赦しを基盤としつつ、「御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされる」(ローマ 8:3-4)と語られ、「キリストという土台の上に」価値ある建物を建て、報いを受ける生き方をしよう励ましています(I コリ 3 章)。

パウロは、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え」そして「今からは、義の栄冠がわたしのために用意されているだけです」、「正しい審判者である主がそれをわたしの授けてくださるのです」、「わたしたただけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」。十字架の贖罪で罪赦され、内住の御霊によって「御霊の実」を实らせるクリスチャンすべてに対して、「義の栄冠」が用意されているということです。

まもなくブラジルでのオリンピックが始まります。ですから、わたしたちも、主の御前にあって、より優れた色のメダルがもらえるように(I コリント 9:27)走り続けたいと思います。さまざまな機会に、さまざまなかたちで、わたしたちの立場を証していくことは、民主主義社会において大切なことと思います。わたしは、エステル記のモルデカイではありませんが、このような時代、このような時期、民主主義の時代に生かされているクリスチャンが、もしかしたら、戦前や、江戸時代のように、キリスト教信仰の自由が制限されるかもしれない方向に「改憲される」危険が散見される状況下で「無関心」であったり、「沈黙」ないし、「改悪」を助けるようなことをするのは、神の前に、そして過去と現在と未来の日本人クリスチャン全体に対して、大きな罪を犯すことになると思います。

パウロは、I コリ 15:58 「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」勝ち負けは時の運、しかし負けることはあっても、わたしたちの小さな戦いは、主の御前に決して無駄ではないことを知っています。この小さな戦いには、主には、価値があり、意味があり、報いの対象でもあると思います。やっても無駄だと、はじめから決めてかかって、何もしないことは、一タラントを土の中に埋めた人のように思います。わたしたちは、二タラントを四タラントにすることにベストを尽くしたいと思います。

*

【遺言としてのメッセージ⑨】

ラッド著『終末論』第九章「神の国」から聴き取る、ラッドの第九の遺言メッセージとは何でしょうか。第九章は、「人間は地上に住むように創造された存在であり、「神は歴史の中に置かれた人間を、救い、また裁くために地上を幾度も訪れておられる」という言葉で始められ、旧約聖書の神学で『展開』される贖罪の歴史の全体は、主の日において区別され、二つの時代に分けられています。新約聖書では、これに幾つかの重要な特徴が追加され、主の日には、御子の来臨、死者の復活、人に対する審判が起こる。終末的な神の国は、主の日、人の子の来臨、死者の復活、最後の審判からなる単一の複合的な出来事によって開始されます。

ヨハネは、千年王国の後、来るべき時代が開始されると、新しい天と新しい地を見えています。それは、神の国の究極的な舞台は地上であるということであり、確かにこれはすっかり変貌した地ですが、同じ地の延長線上にあるものです。この新しい創造に呼応するのが肉体の復活です。ついに、神の贖罪の目的が実現されます。神は贖われた地球上で、神との完成された交わり、奉仕、礼拝をもつように、旧約・新約の双方から贖われた人々を集めて下さる、と語られています。

もし、ラッドが理解しているように、天地万物を創造された神が、この被造物世界を贖い、その只中に「贖われた、復活のからだ」を着せられたわたしたちを、その贖われた大地の上に、贖われ変貌させられた地球の上に、置かれるのだとしたら、わたしたちは、その地球のどこに置かれるのでしょうか。それは分かりません。ただ、このように考えられる可能性はないのでしょうか。キリストの復活のからだは、葬られたときのからだとの連続性を示していました。わたしたちの復活のからだは、現在のからだとの連続性が考えられます。わたしたちが新天新地に住む場所は、現在住んでいる国、地域、風土、景色等との連続性は考えられないでしょうか。もしそうだとすれば、なおのこと、わたしたちは「現在の国のあり方、方向性」等に、主にあって、深い関心、また強い責任感を持ち続けるべきではないでしょうか。

*

【まとめ】

今回は、ICIサマースペシャルの準備メッセージとし、三回シリーズで、ラッドの絶筆『終末論』の九つの章から九つのメッセージに耳を傾けました。準備をされていて教えられることは、神学教育機関においても、伝道・牧会・信徒教育の場においても、ラッドが指摘しているような「福音理解において最も基本的な事柄」「福音理解の骨格」が繰り返し学ばれる必要があるということです。クリスチャンが、見える事象で翻弄されるのではなく、見えない福音の本質的な部分で強化される必要がある、ということです。

といいますのは、パウロが I コリント 15 章で語っているように、今日もまたさまざまな運動や教えにおいて「福音理解の骨格」がよい加減に扱われる傾向が増し加わっているのではないかと思うからです。またこの「福音理解の骨格」のゆがみ、またひずみというものは、その上に建てる家にも大きな影響を及ぼします。

序の部分で語り続けていますが、衆参三分の二の改憲派議席があり、わたしたちはこれにどう対応していけば良いのか、という課題につきましても、わたしたちは、「しっかりした福音理解」に立つのであれば、今後盛んになってくるであろう—特に、経済的な危機や軍事的な危機が訪れたときには、急

激な「ナショナリズムの高揚」に抗することは難しいと思います。社会においては、そのような傾向に迎合し、そのようなムードに飲み込まれるクリスチャン、さらにはそのムードに乗ろうとする牧師、伝道者も出てくると思います。恐ろしい時代です。わたしたちは、そのような時が到来することを念頭に、みことば立って、霊的な備えに入るべき時期にきたというべきと思います。

教会内においては、伝道やリバイバルといわれますが、福音理解の変質した「主の兵士としての忠節」「主の花嫁としての貞潔」の失われた迎合によってなされる取り組みには、特に警戒すべきです。使徒ペテロもこのように語りかけています。「I ペテ 4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。4:14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。」わたしたちは、御霊を悲しませないように、健全な福音理解にしっかりと立脚し、「主への忠節」「主に対する貞潔」を証していくべきと思います。

もしこのような取り組みに関心のある方がおられたら、どなたでも参加申込して下さいましたら感謝です。では、お祈りしましょう。

*

【説教原稿】

http://www.aguro.jp/the-nard-fragrance/20160717_ic_ss_for_ici-ss-ch789.pdf

*

【サマースペシャル・チラシ】

http://www.aguro.jp/d/ici_summer-special_for_jec/20160824-25_ICI-Summer_Special_pamphlet_for_2-jec.pdf